

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2022

課題番号：15K11755

研究課題名（和文）在宅認知症高齢者の住環境整備に関するデータベースシステムの開発

研究課題名（英文）Development of a database system for the improvement of the living environment of elderly persons with dementia living at home

研究代表者

原 祥子（Hara, Sachiko）

島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授

研究者番号：90290494

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者を在宅で介護している家族（主介護者）6名及びその高齢者を担当している介護支援専門員を対象とした面接とそれぞれの自宅及び近隣の観察を実施し、中山間地域ならびに中心市街地（市街地周辺を含む）に暮らす在宅認知症高齢者に対して家族が実施している住環境の具体的整備内容とその意図を明らかにした。

本研究で見出された、認知症高齢者のために実施した住環境の具体的整備内容とその意図には、高齢者の自尊心を傷つけることなく、プライバシーへの配慮をし、家族だからこそ捉えられていた長年の生活スタイルを継続することによる能力の発揮につながっていることが示されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者の約50%は居宅での生活を送っており、認知症高齢者の在宅生活支援を強化することは重要な課題である。在宅認知症高齢者の住環境に関する具体的整備内容を抽出することは、認知症高齢者に対応した在宅環境配慮の手法を開発し、家族と在宅サービス提供者が協働して住環境整備を進める際の手引きとなることが期待できる。

本研究成果は、在宅認知症高齢者の住環境整備に関するデータベースシステムの開発に向けて、そのデータベースに格納するデータとして活用することができる。そして、認知症高齢者が可能な限り住み慣れた地域で生活を続けていくための支援につながり、認知症高齢者の生活の質向上に貢献できる。

研究成果の概要（英文）：Six family members taking care of elderly persons with dementia at home and care support specialists in charge of these elderly persons were interviewed and their homes and neighborhoods were observed to clarify the details and intentions of specific improvements made by family members to the living environment of elderly persons with dementia living at home in mountainous areas and central urban areas (including surrounding areas).

The details and intentions of specific improvements to the elderly's homes found in this study indicated that improvements were made in a way that does not harm the elderly's self-esteem and gives consideration to their privacy, enabling them to continue their long-standing lifestyle that only family members know, thus leading to the demonstration of their abilities.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症ケア 住環境

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国は、世界に類を見ない超高齢社会を迎えており、この高齢化の進展に伴って認知症高齢者も増加の一途を辿っている。また、要介護認定者のうち「認知症高齢者の日常生活自立度」以上の人の約 50%が居宅での生活を送っており<sup>1)</sup>、認知症高齢者の在宅生活支援を強化することは重要な課題となっている。認知症高齢者に居住環境が与える影響は大きく、認知症高齢者に配慮した環境が行動障害の緩和や落ち着きをもたらすことが明らかになっている<sup>2)</sup>。施設環境に関する先行研究では、施設入所している認知症高齢者に対して環境支援を行うための指針として用いられている PEAP (Professional Environmental Assessment Protocol) などが開発されている。わが国でも、PEAP 日本版<sup>3)</sup>が作成され、個室・ユニット化やグループホームなどの施設の環境の整備は急速に進んでいる。一方、在宅認知症高齢者の住環境に関する研究は、施設環境に関する研究の 1 割程度にとどまっております<sup>4)</sup>、在宅環境整備についての研究知見の蓄積は十分とは言えない。在宅環境整備には、住宅改修や福祉用具といった在宅サービスの導入だけでなく、身近な家族介護者による住まいや住まい方の工夫も大切になってくる。これまでの住宅改修や福祉用具の導入は、歩行・移動機能などの身体機能が低下した高齢者の自立や介護負担軽減を目的としたものが主であったが、認知症高齢者に対応した在宅環境配慮の手法を開発し、家族と在宅サービス提供者が協働して住環境整備を進めることが急務である。

厚生労働省の認知症施策推進 5 か年計画<sup>5)</sup>でも、認知症の人が可能な限り住み慣れた地域で生活を続けていくために、地域を基盤にした地域包括ケアサービスを念頭においた住まいや地域のあり方が求められており、「住まい」の整備は地域包括ケアシステムの最も基本的な基盤に位置付けられている。孤独死、認知症徘徊、災害時要援護など、高齢者の抱えるさまざまなリスクを的確に把握し、それを受け止めるための地域のあり様が問われている<sup>6)</sup>。また、認知症高齢者の生活の質を保証するには、住宅だけでなく自由に外出できる徒歩圏、つまり近隣環境まで巻き込んだ住環境整備が求められる<sup>7)</sup>。中山間地域や離島では、認知症サポート医や認知症サポーターの養成が都市部ほど進んでいないことに加えて、高齢者施設やグループホーム等の社会資源も十分ではない一方、住民のつながりや昔から親しんできた場所があることなどは重要な地域資源になると考えられる。地域資源のあり方は、それぞれの地域特性によって異なる。

### 2. 研究の目的

本研究では、地域の実状を踏まえた住環境整備データベースシステムの開発を目指して、データベースに格納するデータをそろえるために、島根県内の地方都市と中山間地域を対象とし、在宅認知症高齢者に対して家族及び在宅サービス提供者が実施または必要と考える住環境整備の内容(具体的整備内容とその意図)を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1)調査対象者

認知症高齢者(認知症高齢者の日常生活自立度 以上・障害高齢者の日常生活自立度 J または A の者)を 1 年以上在宅で介護している家族(主介護者)6 名(中山間地域 3 名、中心市街地・市街地周辺 3 名)及びその高齢者を担当している介護支援専門員

#### (2)調査方法と内容

自宅への訪問調査とし、自宅及び近隣の観察、家族及び介護支援専門員への半構成面接を行った。主な面接内容は、自宅や自宅周辺について高齢者のために行った(必要と考える)工事や修理、高齢者のために取り入れた(必要と考える)道具や器具、家の中や周辺のことが高齢者のために工夫している(工夫が必要と考える)こと、ならびにそれぞれの意図とした。

#### (3)分析方法

観察記録と面接逐語録から、高齢者のために実施した(必要と考える)住環境の《具体的整備内容》とその〈意図〉を抽出する。

### 4. 研究成果

(1)中山間地域に暮らす a さん(80 歳代後半・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 b、障害高齢者の日常生活自立度 A2、要介護 1 で通所介護を週 2 回利用、娘夫婦と 3 人暮らし)と同居する A 氏(50 歳代後半・女性、a さんの娘)のケース(表 1)

この地域の冬の寒さは厳しいため、a さんの〈居室は窓があることよりも暖かく〉居られることを意図し、《窓はないが一番あたたかい部屋を居室にする》という配慮をしていた。A 氏は「お風呂は母がひとりですっきりできることも必要なのかなと思う」と話し、1 か所だけ《浴室に手すりをつける》ことで a さんが〈一人で入浴できるように〉していた。また、a さんの移動動作はゆっくりで排泄が間に合わないことがあるため、トイレは居室の近くだが夜間は《ポータブルトイレを居室におく》ことで〈排泄の失敗がないように〉していた。古い家屋であるために「家の中とか玄関とかに段差があるけど、ゆっくり、だいたい手を置くところが決まっている感じで、

段差とか、こう下りて、上がって、こういう路線ですよ」とA氏が言うように、《段差があってもそのままにしている》が、それは<長年の決まった動作と道筋で移動できるように>ということ在意図していた。そして、庭の草取りや洗濯はaさんの役割であり、《庭の草取りのときに腰掛けるaさん専用の椅子を作製して置く》ことや《洗濯機のボタンに操作順の数字を書いておく》ことで<aさんの役割を果たせるように>していた。さらに、<懐かしさがよみがえるように>ということ在意図して、aさんの《なじみの利用者がいる通所介護を選択する》ことをし、「(aさんが)長年会えなかった旧友たちにも会えて、懐かしさがよみがえるみたいで、デイをとても楽しみにしている」と語られた。

表1 A氏(aさん)のケース

<意図>	《具体的整備内容》
居室は窓があることよりも暖かく	窓はないが一番あたたかい部屋を居室にする
一人で入浴できるように	浴室に手すりをつける
排泄の失敗がないように	ポータブルトイレを居室におく
長年の決まった動作と道筋で移動できるように	段差があってもそのままにしている
aさんの役割を果たせるように	庭の草取りのときに腰掛けるaさん専用の椅子を作製して置く
	洗濯機のボタンに操作順の数字を書いておく
懐かしさがよみがえるように	なじみの利用者がいる通所介護を選択する

(2) 中山間地域に暮らすbさん(90歳代・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 b、障害高齢者の日常生活自立度 J2、要介護1、長男の嫁と2人暮らし)と同居するB氏(60歳代・女性)のケース(表2)

<ベッド周りで身の回りのことが自分でできるように>《新しい紙パンツはベッドの横に3、4枚置いておく》《ベッドからトイレ・浴室までを歩行車で移動できるようバリアフリーにする》《自分で起き上がるよう特殊寝台とサイドレールをレンタルする》《ベッドの横に化粧台と椅子を置く》《ベッドに腰掛けたときのbさんの目線とテレビが合うようテレビ台を調整する》を実施していた。また、《bさんのベッドから食堂までの歩行車の通り道をふさがない》ことで<行動範囲が居室だけにならずに家じゅうを歩行車で移動できるように>していた。さらに、<外に出かけたときに転ばないように>《買い物先の店員さんに手伝ってくれるよう先回りして頼んでおく》《bさんが近所に出かけるよりは近所の人に来てもらうように声をかける》《坂の上にあった墓を家の裏に移す》を実施していた。

表2 B氏(bさん)のケース

<意図>	《具体的整備内容》
ベッド周りで身の回りのことが自分でできるように	新しい紙パンツはベッドの横に3、4枚置いておく
	ベッドからトイレ・浴室までを歩行車で移動できるようバリアフリーにする
	自分で起き上がるよう特殊寝台とサイドレールをレンタルする
	ベッドの横に化粧台と椅子を置く
行動範囲が居室だけにならずに家じゅうを歩行車で移動できるように	ベッドに腰掛けたときのbさんの目線とテレビが合うようテレビ台を調整する
	bさんのベッドから食堂までの歩行車の通り道をふさがない
外に出かけたときに転ばないように	買い物先の店員さんに手伝ってくれるよう先回りして頼んでおく
	bさんが近所に出かけるよりは近所の人に来てもらうように声をかける
	坂の上にあった墓を家の裏に移す

(3) 中山間地域に暮らすcさん(80歳代・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 a、障害高齢者の日常生活自立度 A1、要介護1、息子夫婦と3人暮らし)と同居するC氏(50歳代・女性)のケース(表3)

家屋はバリアフリーの木造2階建てで、cさんは通所介護(週2回)と据え置き型手すりの貸与を利用していた。C氏は、バリアフリーにして《段差のないフラットな空間をつくる》ことで<先々車椅子でも家に居られるように>と考えていた。また、玄関には高い段差があるため《cさんもケアスタッフも玄関ではなくて勝手口から出入りする》《勝手口の3段の階段に手すりを置く》ことで<cさんが安全に出入りし、人の見送りができるように>していた。そして、<リハ

ピリテーションを続けられるように>《週2回のデイサービス利用を継続する》、<家事の一部をやるのが家にいるcさんの役割になるように>《廊下の雑巾がけと洗濯物たたみはしてもらう》ことをしていた。

表3 C氏(cさん)のケース

<意図>	《具体的整備内容》
先々車椅子でも家に居られるように	段差のないフラットな空間をつくる
cさんが安全に出入りし、人の見送りができるように	cさんもケアスタッフも玄関ではなくて勝手口から出入りする
	勝手口の3段の階段に手すりを置く
リハビリテーションを続けられるように	週2回のデイサービス利用を継続する
家事の一部をやるのが家にいるcさんの役割になるように	廊下の雑巾がけと洗濯物たたみはしてもらう

(4) 中心市街地に暮らすdさん(80歳代・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 a、障害高齢者の日常生活自立度 J2、要介護3、夫と息子との3人暮らし)と同居するD氏(50歳代・男性、dさんの息子)のケース(表4)

家屋は古い木造平屋(3DK)で、家の脇の小道を抜けたバス路線沿いに商店がある。dさんは通所介護(週3回)、訪問介護(週3回)、訪問看護(月2回)、住宅改修(玄関・トイレ・風呂の手すりや敷居の段差解消)などを利用していた。D氏は《手すりをつけたり敷居の段差を解消したりする》ことでdさんが<家の中でつまずいたりよろけたりして転ばないように>し、《ベッドとベッド用手すりをやめて布団にする》ことで<伝い歩きやいざりなどのdさんなりの方法で家の中を移動できるように>していた。また、dさんの<物の紛失による混乱を最小限にするために>《失くしものはそのたびに探す》《都合のつくときに部屋の中の片づけをまとめてする》ことをしていた。そして《いつも一緒にいる自分がないときには近所の親戚に声をかけておく》ことで<家の中で転倒したことがあり近所の商店にも出かけたりするdさんの様子を見守れるように>していた。

表4 D氏(dさん)のケース

<意図>	《具体的整備内容》
家の中でつまずいたりよろけたりして転ばないように	手すりをつけたり敷居の段差を解消したりする
伝い歩きやいざりなどのdさんなりの方法で家の中を移動できるように	ベッドとベッド用手すりをやめて布団にする
物の紛失による混乱を最小限にするために	失くしものはそのたびに探す
	都合のつくときに部屋の中の片づけをまとめてする
家の中で転倒したことがあり近所の店にも出かけたりするdさんの様子を見守れるように	いつも一緒にいる自分がないときには近所の親戚に声をかけておく

(5) 中心市街地周辺に暮らすeさん(60歳代・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 b、障害高齢者の日常生活自立度 B1、要介護2、夫と息子との3人暮らし)と同居するE氏(70歳代・男性、eさんの夫)のケース(表5)

家屋は木造2階建て、家の裏手に墓がある。eさんは家の中をT字杖といざりで移動し、通所介護(週3回)、訪問介護(毎朝)、訪問看護(月2回)、福祉用具貸与(ベッド用手すり)と購入(腰掛便座)などを利用していた。E氏は、eさんが<とにかく転ばないように>《排泄はトイレではなく腰掛便座、入浴は自宅ではなくデイサービスで行うことにする》《墓地まで行かずに家の中で拜むことを墓参りとする》ことをしていた。また《通所介護で作成したものを居間のボードに飾る》ことで<通所介護での楽しい思いを家でも味わえるように>していた。

表5 E氏(eさん)のケース

<意図>	《具体的整備内容》
とにかく転ばないように	排泄はトイレではなく腰掛便座、入浴は自宅ではなくデイサービスで行うことにする
	墓地まで行かずに家の中で拜むことを墓参りとする
通所介護での楽しい思いを家でも味わえるように	通所介護で作成したものを居間のボードに飾る

(6) 中心市街地周辺に暮らす f さん (90 歳代・女性、認知症高齢者の日常生活自立度 a、障害高齢者の日常生活自立度 J2、要支援 1、独居) の向かいの家に暮らす長男の嫁 F 氏 (70 歳代・女性) のケース (表 6)

f さんの家屋は古い木造平屋 (2K) で、f さんは健康教室 (週 1 回)、半日の通所介護 (週 1 回)、福祉用具貸与 (特殊寝台、トイレ据え置き型手すり) と購入 (シャワーチェア)、住宅改修 (浴室の手すり)、配食サービスを利用し、約 30m 先にある商店まで杖で買い物に行っていた。F 氏は、f さんの < 歩行のための筋力を維持できるように > あえて《台所と風呂場に行く途中にある段差は解消しない》でいた。また、朝をゆっくり過ごす < f さんの生活時間の流れに沿ってペースを乱さないように > 《午後から半日のデイサービスを利用する》ことをしていた。そして < 自分のことは自分でするという f さんの気持ちを大事にして、できていることはそのまま自分でやってもらい、張りのある生活になるように >、《風呂場とトイレに手すりをつける》とともに、火の扱いが多少心配ではあるが《電磁調理器に変えずにガスコンロのままにする》、ご飯は自分で炊けるので《配食サービスは夕食のおかずのみを利用する》ことをしていた。

表 6 F 氏 (f さん) のケース

< 意図 >	《具体的整備内容》
歩行のための筋力を維持できるように	台所と風呂場に行く途中にある段差は解消しない
f さんの生活時間の流れに沿ってペースを乱さないように	午後から半日のデイサービスを利用する
自分のことは自分でするという f さんの気持ちを大事にして、できていることはそのまま自分でやってもらい、張りのある生活になるように	風呂場とトイレに手すりをつける
	電磁調理器に変えずにガスコンロのままにする
	配食サービスは夕食のおかずのみを利用する

#### (7) 総合考察

本研究で見出された、認知症高齢者のために実施した住環境の《具体的整備内容》とその < 意図 > には、高齢者の自尊心を傷つけることなく、プライバシーへの配慮をし、家族だからこそ捉えられていた長年の生活スタイルを継続することによる能力の発揮につながっていることが示されていた。また、懐かしさの感情といった生活の豊かさにつながるような配慮もされていた。認知症高齢者の在宅環境整備には、住宅改修や福祉用具といった在宅サービスを導入するだけでなく、身近な家族による住まいや住まい方の工夫や意図をいかに取り入れていくかも重要になってくるのではないかと考えられた。

#### 【引用文献】

- 1) 厚生労働省 (2012) 「認知症高齢者の日常生活自立度」 以上の高齢者数について、  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002iaui1-att/2r9852000002iavi.pdf>
- 2) ユリエル・コーヘン、ジェラルド・D・ワイズマン / 岡田威海監訳 (1991 / 1995): 老人性痴呆症のための環境デザイン、彰国社
- 3) 児玉桂子、他 (2002): 痴呆性高齢者にふさわしい生活環境に関する研究、厚生科学研究費補助金 21 世紀型医療開拓推進研究事業平成 13 年度報告書
- 4) 高橋志保、赤木徹也 (2010): 我国における認知症高齢者の居住環境に関する研究動向と課題; 第三報 最近 5 年間 (2004 - 08 年) を主として、老年社会科学、32(2)、277
- 5) 厚生労働省 (2012) 「認知症施策推進 5 か年計画 (オレンジプラン)」  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh-att/2r9852000002j8ey.pdf>
- 6) 森一彦 (2014): 認知症高齢者の新たな住まい方、日本認知症ケア学会誌、13(2)、409-416
- 7) 森一彦、他 (2009): エイジング・イン・プレイス 超高齢社会の居住デザイン、学芸出版社、22-24

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原祥子、竹田裕子
2. 発表標題 在宅認知症高齢者の住環境整備に関する家族の意図についての予備的研究 - 中山間地域に暮らす1事例の分析 -
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原祥子、竹田裕子
2. 発表標題 在宅認知症高齢者の住環境整備に関する家族の意図についての予備的研究 - A県の中山間地域に暮らす1事例の分析 -
3. 学会等名 第10回日本認知症予防学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原祥子、竹田裕子
2. 発表標題 在宅認知症高齢者の住環境整備に関する家族の意図についての予備的研究 - A県の中山間地域 B 町に暮らす1事例の分析 -
3. 学会等名 日本認知症ケア学会 第22回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原祥子
2. 発表標題 在宅認知症高齢者の住環境整備に関する家族の意図についての予備的研究 - 中心市街地とその周辺に暮らす2事例の分析 -
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原祥子
2. 発表標題 在宅認知症高齢者の住環境整備に関する家族の意図についての予備的研究 - 市街地周辺の町に暮らす1事例の分析 -
3. 学会等名 日本看護研究学会 第47回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	廣富 哲也  (Hirotomi Tetsuya)  (70379692)	島根大学・総合理工学研究科・准教授    (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------